

原爆文学研究会報

第六十九号

原爆文学研究会 二〇二三年一〇月

母の〈狂気〉を聞く

栗山 雄佑

皆さま、はじめまして。今年度から入会しました、佐世保工業高等専門学校 栗山雄佑と申します。これから何卒よろしくお願ひします。自己紹介がさらに、と伺っておりますので、私がやっている研究を絡めながら一筆書きたく思います。

私のメインの研究は戦後から現代に至る沖縄の文学作品を基に、その中にある様々な怒りの感情を読み込もうといったものです。特に、目取真俊の作品について研究を行っているのですが、その研究の発端となったものの一つに目取真が書いた「平和通りと名付けられた街を歩いて」という作品があります。作品は、一九八三年七月に行われた献血運動推進全国大会に臨席するために訪沖した皇太子夫妻（現上皇夫妻）とそれによる過剰警備に揺れる那覇市を舞台に、認知症を患い街を徘徊するウタという女性が、那覇市を通過する夫妻の車列に突然飛び出し、自身の大便を窓越しになすりつけた、といった事件を描いたものです。

この簡略なプロットから伺えるように、作品は後藤みな子「炭塵のふる町」と近い構造を持っています。昭和天皇の巡幸の車列を追う母親、彼女を追いかける「私」、あるいは〈狂気〉を持つ妻から逃げ続ける「私」の父親の三者が抱える戦争の記憶とは、あるいは〈神〉から人間天皇としての〈象徴〉に変貌を遂げた昭和天皇にぶつけられなかった言葉とは何か。この観点から二つの作品を読むとき、「天皇陛下ばんざい」と叫

ぶ「私」の母親、糞便が付いた手で夫妻の車の窓ガラスを叩き周囲の者には聞き取れなかった〈何か〉を叫んだウタの〈声〉をいかにして聞き受けることが出来るのか、私は引つ掛かり続けています。

「平和通り」の詳細な批評については拙著にて書きましたが、二つのテキストに共通する皇族に対峙する人物が〈狂った女性〉とされていることに、あらためて注目すべきではないでしょうか。後藤作品で繰り返し描かれる長崎への原爆投下で息子を失った母の〈狂気〉、「平和通り」で商売仲間のハツの口を借りて提示される沖縄戦時にウタが夫と息子を亡くした経験の双方は、二人に付与された〈狂気〉に起因するステイグマによって両作品における〈聞き手〉の役割を持つ人物にさえ、事実の裏にある個人の思いは十分に伝わることはありません。双方の〈母親〉が抱え続ける様々な思いに〈狂気〉という言葉が付与され、そのようなことなど知る由もなく挙行される皇族―戦争責任者であり〈国家の象徴〉の訪問において、車列を追いかける／に飛び出す行為として発露した点。その意味を問うことにこそ、関東大震災から一〇〇年が経過した今、その後に来た沖縄戦、原爆投下に連なる天皇制の影響を陰に陽に受けている日本を考えなおすことにつながるのではないかと考えています。

同時に踏まえておきたいのが、双方の〈母親の狂気〉を側で見、代弁を試みようとして幾度も転倒する人物ではないでしょうか。後藤作品については言うまでもないですが、「平和通り」においても、過剰警備に憤りウタの代わりに車列に唾を吐きかけようとする孫のカジュと比し

て、〈子〉である正安は内心に憤りを持ちながらも周囲の圧力に従い、時にはウタに暴言を浴びせています。ただ、それもまた、「炭塵のふる町」で母親の代わりに浴びせようとして「口のなか」に留まった「かえせ！ おにいちゃんをかえせ！ おかあさんをかえしてくれ！」と同様に、皇族に言えない〈何か〉を言いあぐねる姿ではないでしょうか。双方にあるジェンダー差を考慮する必要がありますが、二つの空間における〈聞き手〉の観点から両作品を読み直すこともまた、求められていくのではないのでしょうか。

「炭塵のふる町」に関しては、今回の小文を踏まえた内容で今後研究会にて発表出来ればと思っています。その他にも、色々プランを構想(妄想)していますので、その都度ご批評をしていただけたらと思います。

【注】

一、拙著『〈怒りの文学化〉 近現代日本文学から〈沖繩〉を考える』(春風社、二〇二三・三)内に「テロル・皇族・沖繩を再考するための〈弱さ〉」と題して書いています。

第六十九回 原爆文学研究会報告

二〇二三年七月一日(土)、第六十九回研究会を開催しました。前回是对面とオンラインのハイブリッド形式で開催しましたが、今回は全面オンラインでの開催となりました。

個人の研究発表は、中野和典さんによる「教科書と「原爆文学」Ⅲ

——原民喜「夏の花」を中心に」でした。つづいてワークショップとして、今年の三月三日に亡くなられた大江健三郎の追悼企画「大江健三郎と核のアクチュアリティ」が開催されました。柳井貴士さん「大江健三郎における〈沖繩体験〉——ヒロシマ、オキナワ、アメリカと

核」、南徹貞さん「大江健三郎と市民運動——「後期の仕事(レイト・ワーク)」を中心に」という二つの報告が行われました。

◇研究発表

教科書と「原爆文学」Ⅲ

——原民喜「夏の花」を中心に

中野 和典

本発表は「『夏の花』はどのように読まれてきたか？」(第六八回原爆文学研究会および「原爆文学研究」第二一号)に続くものである。発表者は前回の発表で原民喜「夏の花」について①カタカナ詩・②引用・③加害性・④植民地主義と性役割・⑤教材論という五つの視点から残された課題を挙げていたが、本発表では第五の課題として挙げた教材論を中心に、残り四つの課題とも関係づけながら「夏の花」についてあらためて考察した。

まず、国語教材としての「夏の花」について基本的な事項を確認した。「夏の花」は一九七五年度から中学・高等学校の国語教科書に掲載されつづけてきたいわゆる定番教材のひとつと言える。「夏の花」を教材化する背景には、戦争を知らない教員や生徒が増えてきたことへの危機意識が一貫していること、その一方で記録から表現へと「夏の花」の捉え方の重心が変化していることなどを紹介した。

次に「夏の花」における被害と加害について考察した。「夏の花」には「私」たち家族が営んでいた〈工場〉とそこへ動員されていた〈学徒〉も被爆したことが語られている。これらについて解説している教科書の指導資料は少ないが、〈工場〉のモデルは軍需工場を営んでいた原の実家であり、〈学徒〉はその工場に動員されていた女学校の生徒た

ちである。原は小説集『夏の花』に収められた「昔の店」で自分の家の戦争加害の側面を直接的に描いていることなども考え合わせれば、「夏の花」の「私」も単なる戦争被害者とは言えない。「夏の花」を国際化が進む教室で読む、あるいはより海外にも開かれた形で読みなおすためにも「私」を単なる被害者と見ず、その加害性にも目を向けて解釈した方がよいのではないか。

次に「夏の花」のカタカナ詩について考察した。本論ではダダ・シュルレアリスムの視点からの考察を試みた。原民喜のカタカナ詩には

(一) カタカナ表記によるひらがな表記の散文や詩との差異化、(二) 文法のほころびによる感覚の混乱、(三) 原始的感覚による原子野のイメージ喚起と差異化という大きく三つを重ねることによって、原爆以後の世界の非日常性、破壊と混乱の徹底、超現実的な現実性を印象づけている。

最後に「夏の花」の構造分析を行って上記の考察を統合しなかったのだが、力が及ばなかった。論文化する際の課題としたい。

◇ワークシヨップ

報告一 大江健三郎における〈沖縄体験〉

——ヒロシマ、オキナワ、アメリカと核

柳井 貴士

大江健三郎というひとりの作家の冒険の道筋は多岐にわたり、フィクションである小説の生成には自らの人生の営みと、時代にもとづく社会状況が深くかかわっている。あるいはその人生のはじまりである時空間、すなわち愛媛県の間部森の中で、戦時中に生まれたということも重要な意味を持つだろうし、また一九三五年、昭和一〇年に誕生した大

江は、当時の少年少女がそうであったように、「軍国教育」を受け、まさに皇国の少年の思想を内面化していた。しかし敗戦とそれに続くアメリカを中心としたGHQの戦後処理政策をもとに、「民主主義」という新たな機軸が示され、国家、思想は変容した。その期間に多感な少年期を過ごし、かつ読書という〈ここ〉ではない場所へとつながる回路を武器にしながら育ったのが大江健三郎であり、戦中から戦後の変容とそこに生きた自己の思考形成のあり様をことあるごとに表明している。

長男光氏のハンディを持つての誕生と、「原水爆禁止世界大会」への参加の重なりにより、核という問題を前景化した大江は、『ヒロシマ・ノート』の執筆に続き、沖縄と向き合うことで『沖縄ノート』を記す。本発表では「アメリカの戦略家たちのいう、局地的な核戦争においてもまた、ヒロシマ、ナガサキの人びとをのぞいてわれわれは一般に、かつてそれを経験したことがないのであるから、核戦争の脅威を認識し、それを恐怖し、その兆しに抵抗するためには、核戦争にたいする想像力の発揮が必要である」（大江健三郎『大江健三郎同時代論集2』岩波書店、一九八〇・一二、二一四頁）と述べる大江における「想像力」という武器を確認し、そこから一九七二年の本土復帰前の沖縄から見えてくる現実にコミットする大江の姿を追っていった。沖縄側からの反応として新川明や岡本恵徳の批評をとりあげ、沖縄という状況をめぐりながら、大江が語るのがあくまで「日本人」としての当事者性の問題であったことを指摘した。また一九六八年に行われた大城立裕との対談をとりあげた。沖縄の戦争をめぐる被害者性と加害者性に目を向けて発言した大城との議論において、大江の「日本人」という観点が沖縄の現実を飛び越え、「人権」という問題と紐づきながら「復帰」が語られた点を考えた。それは「文化」という問題ともかわり、大江との間で対置された「日本」の捉え方が、大城のその後の言説形成につながる可能性を示唆した。大江の〈沖縄体験〉は重要である。同時に、沖縄側の反応のあ

り方をふまえることで、同時代的な本土／沖縄という状況の一端を見出した。

報告二 大江健三郎と市民運動

——「後期の仕事（レイト・ワーク）」を中心に

南 徽 貞

大江健三郎の死去を報じる韓国のメディアは、彼が文化勲章を辞退したことや歴史問題についての発言に注目し、金芝河救命運動、「九条の会」活動などの社会的な活動を「行動する良心」という言葉で、高く評価した。大江の小説についての言及は少ないという、このような傾向は韓国に限った現象ではないだろう。

周知のように、大江は、加藤周一や井上ひさし、小田実など文学者たちとともに「九条の会」の呼びかけ人として参加、東日本大震災後の原発運動にも姿を現し、反戦・反核思想を晩年まで貫いていた作家であった。エドワード・サイドの『晩年のスタイル』に影響された『晩年様式集』^{スタイル}は、原発発集会への作者の参加経験が語られており、「…私らは生き直すことができる。」という最後の自作詩の引用が、「個人」としてではなく「私ら」というコミュニケーションを強調した震災後のメッセージとして読み取れる作品である。同時期の「九条の会」の講演においても、

自分の主張より亡くなった同僚たちの作品や言葉を引用しつつ「死者との連帯」を強調したのは注目に値する。

大江作品の多くの場合、「死と再生」「虚構と現実」「歴史性とアクチュアリテイ」という両義性がみられる主題が特徴であり、そこに「戦後日本」のあり方を問う作意があるといえる。大江は、市民運動での交流を通して「共同の認識」を確かめることで、そこからまた書齋に戻り小説を「書き直す」、「書き続ける」ことの意義を発見し、「後期の仕事」を果たすことができた。自分の終わりを意識せざるをえない「後期の仕事」の時期に、3・11や「沖縄裁判」という事件に巻き込まれたものの、その「崩壊感」を新しい作品の構想へと置き換え、最後の作品を世に出したのである。この最後の作品を、「死んだ友人たちに伝えた」という作者の望みは、叶えられただろうか。北朝鮮の核の脅威、ロシア・ウクライナ戦争の悲劇が未だに続くいま、明るいと云えない「私ら」の未来において、大江の「生き直す」という言葉の意味を考えるために彼が残した小説を読むことは有意義であろう。

彙報

第六十九回 原爆文学研究会

○日時 二〇二三年七月一日（土）

○会場 於 ウェブ会議システムを利用したオンライン形式で開催

○研究発表

教科書と「原爆文学」Ⅲ——原民喜「夏の花」を中心に

中野 和典

○ワークショップ「大江健三郎と核のアクチュアリテイ」

司会者：楠田 剛士 報告：柳井 貴士・南 徹貞

編集後記

巻頭エッセイは栗山雄佑さんをお願いしました。栗山さんは、第六十九回研究会の少し前に入会された新しいメンバーで、今年の三月に春風社から博士論文をもとにしたご著書を刊行されています。本エッセイは、「沖縄文学」と「原爆文学」の接点を提示するもので、栗山さんが今後の研究会で後藤みな子「炭鉱のふる町」を論じられることを心待ちにしております。今回は巻頭エッセイを寄稿していただきありがとうございます。ございました。

さて、今回の会報編集は、第二期から世話人會に加わった後山が担当しました。世話人となってから一年半が経過しましたが、今回が初めての会報編集でした。六十九回研究会の発表者の皆様、栗山様、世話人會の皆様にはご迷惑をお掛けしたことも多々あると思いますが、ご対応いただき大変助かりました。今後も微力ではありますが、原爆文学研究会がより良い研究会となるように尽力してまいります。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

最後になりましたが、研究会にご参加いただいた皆様、会報への執筆をご快諾いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

(後山 剛毅)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四〇一八〇 福岡市城南区七隈八一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 URL <http://www.genbunken.net>